

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2016年10月13日（木）

場 所：名古屋キャンパス N棟3階 社会倫理研究所 会議室

テーマ：Muslim Cultures and pre-Islamic Pasts:
Changing Perceptions of “Heritage”

報告者：Dr. R. Michael Feener (Sultan of Oman Fellow at the Oxford Centre for
Islamic Studies, Oxford University)



イスラームの啓典『クルアーン』には、「国中を歩き廻って、（天啓を）嘘だと言った者どもの最後がどんなものかよく視るがよい」（「イムラーン一家章」137節他、井筒俊彦訳『コーラン』岩波書店）という一節が何度も登場する。イスラーム文明がアラビア半島からアフリカ、ユーラシアへと広がる14世紀もの間に、ムスリムはこの章句を様々に解釈して、前イスラーム期の歴史的遺産（遺物）に対処してきた。

いくつかの例をあげてみよう。エジプトではピラミッド、スフィンクスなどは、遺跡の陰を歩いた預言者ムハンマドの範例をよりどころとして、決して破壊されなかった。よく知られた14世紀のムスリムの歴史家イブン・ハルドゥーンも、北アフリカからアラビア半島に広がる古代遺跡に魅了された。さらに南アジアや東南アジアでは、ヒンドゥー文化を表象するものがモスクやイスラーム廟でいくつも見出される。ジャワにイスラームを広めるのに功績があったとされる伝説の「九聖人」の廟には、ヒンドゥー教の遺跡にあった男女の性器を表現した石の装飾物が保管されている。南インドのケララにあるモスクには、説教壇の最上段の部分には、聖母マリアが描かれた「聖なる椅子」の一部とされるパネルが用いられている。また、アリストレスとプラトンを師と仰ぐムスリム学生の絵からも、イスラームが前イスラーム期の文明を称

賛し、取り込んでいったことが示される。口承伝統やテキストにおいても同じことが跡付けられる。

しかしながら、前イスラーム期の文学遺産がイスラームに取り込まれたことは、後世のムスリム学者の多くによって否定されることとなった。これは、近代においてイスラーム思想やムスリムのポピュラー・カルチャーが、「宗教」に対してより排他的な教条主義に傾斜していったことを示している。イスラームの威信が近代世界において他文化の脅威にさらされていると受け取られるようになったこととも関係がある。前近代において、拡大し続けるイスラーム文明は、強い立場で他文化に対処し、寛容にも広い枠組みの中にその伝統を取り込んで伝えてきた。文化的自信が前イスラーム期の過去に関心を持つことを可能にしたが、それはヨーロッパ帝国主義によってかなり危うくなった。そのために20世紀後半には、ムスリムの言説は正統な遺産というより排他的なイスラーム的観念と考えられるものをめぐって形成されるようになった。この言説は前イスラーム期の遺産という要素を周縁化しがちであった。

近年タリバーンによるバーミヤンの仏教遺跡破壊、モルディブの博物館の仏像破壊など、ムスリムによる前イスラーム期のシンボルに対する暴力事件が起きている。その一方、(宗教の)純化を強調するサウジアラビアさえも、前イスラーム期の考古学的発掘を支援している。それによって西暦紀元初期のアラビア半島でヘレニズム文化が受容されたことを示す工芸品が発見された。そこからは、アラブ人がその地中海ヘレニズム文化とイスラーム台頭のあとも関心を持ち続けたことが、18世紀のシリアで描かれた絵からも証明された。これらはムスリムと前イスラーム期の遺産との関係の諸側面を示す先例となっていることも忘れてはならない。

遺産という考えに対する「イスラーム的」アプローチはひとつではない。過去が現在の生活にもつ意味、また将来のヴィジョンにもつ意味についての議論することは、ムスリム世界の中で様々な社会と交わる考えや経験を幅広く取り込んでいくダイナミックな言説を形成するであろう。

(文責：小林 寧子)